



## けんかの向こう側

園長 野中泉

ある日の夕方の園庭のことです。すいか組のこむぎちゃんときほちゃんが何かもめているようで、きほちゃんは泣いています。どうしたの、けんか？と声をかけると、こむぎちゃんが「あのな、きほがなこむぎ、こむぎって呼んでたみたいやけどな、気がつかんかったから普通に走ってただけなのにな、無視されたと思ったんやって」そうなの？ときほちゃんの顔を見ると涙のままに頷きます。「無視されたから怒って泣いてたの？」と重ねて尋ねると「ううん」と首を横に振るきほちゃん。「怒ってないの、全然気づいてくれないから、悲しんでいるだけ」え？「だからな」とこむぎちゃんがおおまじめな顔で続けます「のなちゃん、これはけんかじゃないねん。誰も怒ってないから。けんかじゃなくて、ただ言い合っているだけ」。「そう、けんかじゃないの」と大きく頷くきほちゃん。なるほど、けんかの定義もなかなかに奥深いもんです（笑）

けんかと言えば、いつも思い出すエピソードがあります。何年も前のことになりますが、5歳児の男の子ふたりが、それは激しいけんかをしていました。20分以上、ものすごい剣幕で、言い争っていたふたり。泉州弁での巻き舌（？）を交えた舌戦は、なかなかのものだったのですが、長引くけんかにお腹もすいて給食が心配になってきたひとりが、けんかの途中で「もう、けんか明日しよう！」と怒鳴りながらけんか相手に突然の提案。「仲直りではなく、けんか明日に持ち越し」の唐突な提案にきょとんとした相方が、すぐさま「けんか明日？あかん。そんなん、明日じゃ、けんか始められんもん。忘れるやん、なんのけんかやったか」と怒鳴り返したのです。そのやりとりに「そりゃ、そうだ」と、横にいた亀ちゃん（川崎保育士）とふたりで顔を見合せ、思わず吹き出してしまったのでした。

アトムの子どもたちを見ていると、小さな頃から大小さまざまなけんかを繰り返してはいるだけあって、「けんか」のことをよく知っているなど感心させられることがしばしばあります。そして4歳、5歳ともなれば、なかなかに「けんか上手」です。黙っている相手に「黙ってないで、おまえもなんか言え、俺は言ったで」と促したり、逆になんで黙ってるんやと責められた子が「今、考えてる途中や」と歯を食いしばって言い返したり。けんかに乗じて、「○○って、前も、こんなんでさあ」と過去のことをほじくり返そうとすると、その相手が「前のことは関係ないやろ。今はこのこと話してんじゃ」と論点（？）を戻したり。

誤解のないように言いたいのですが、「けんか上手」という表現は、決してスマートに冷静にやりとりができると言っているのではないです。もちろん、言葉での表現が上手じゃなくて、すぐに噛みついたりひつかいたりしてしまう1歳や2歳に比べたら、4・5歳児では手が出ることは、ずいぶん減ります。それでも顔を真っ赤にして地団駄踏んで、涙をポロポロこぼしながらであっても、うまい言葉で言えなくったって、目の前にいる相手にわかってほしいと必死であきらめない、そんな子どもたちの姿には、私たち大人も学ぶことが多いと、日々感じています。

亡くなった女優樹木希林さんの娘でエッセイストの内田也哉子さんのこんなインタビュー記事を読んだことがあります。日々、夫である本木雅弘さんと衝突することがありますかという質問に対し「しょっちゅうです。夫婦がもめていると、長男が2人とも悪くないから!と止めに来ることもある」と答えた也哉子さん。続けて子どもの前で夫婦のけんかを隠すことはしていないと言い、その理由について「子どもたちの前ではびしっとして、急に陰でっていうのではなくて、常にそれはもう、もれてしまっているだけなんですけど、そこの中からもう学んでもらうしかない。こうやって、他人のふたりは一生懸命すり合わせながら、家庭を築いていくんだなど…」と話されていたことを、とても印象深く読みました。

「他人のふたりが一生懸命すり合わせながらの姿から、子どもに学んでもらうしかない」という也哉子さんの言葉は、私たちが、アトムのめざしたい場所を思い描きながら、必死で奮闘している日々の努力、すなわち、子どもたちに、どんな大人の風景を見せていきたいかという願いをおんなじだなと思いました。当たり前ですが、人間関係には、イヤになってしまうこともあります。大人になればなるほど、話し合うことが大事とわかっちゃいても、面倒だと思うことの方が正直多い。でも、その「他者とのすり合わせ」の日々こそが、「共に生きる」ということの、『根っこ』に他ならない、そう考えながらいます。